

編集後記

「神奈川大学言語研究」第42号は、多くの人の努力の結果です。毎年委員会のメンバーは、他の活動もある中で、この雑誌が発行されることを可能にしてくれました。また、公開されている記事の選択と改善に時間を割く査読の作業をしていただいた方々の努力もあります。現在59人の協会のメンバーは、ある先生は関心のある分野に関する研究グループを作成し、ある先生は言語研究センターの図書館の保守と改善で協力し、またある先生はこの雑誌に掲載するための教育と言語学に関連するトピックに関する論文を発表する予定です。

私たちの雑誌に寄稿できるのは言語研究のメンバーだけではなく、私たちの大学で教えており、言語教育と言語学に興味があるすべての教員と非常勤講師も対象です。このようにして、教授の研究レベルと、大学での仕事に対する満足度の向上に貢献すると考えています。

2020年、我々の22人のメンバーが参加する新しい学部「国際日本学部」が創設され、2021年には「みなとみらい」の新しいキャンパスへの移籍する計画があります。現在の会員のうち58名がそれらの計画に参加し、新たな可能性が開かれます。新しい「みなとみらいキャンパス」は、メンバーの大半が仕事をするスペースとなり、言語研究センターは今まで通りに一緒に彼らの研究を支援し、私たちの大学の学問の質を向上させるでしょう。

この雑誌は会員にとっていつまでも役立ち、会員の学術および研究開発に貢献すると確信しています。

言語研究センター所長
アルトゥーロ バロン

35号以来7年ぶりに編集後記を書くことになった。とは言っても、所長と半分ずつである。今回は、紀要というものについて書いてみたい。振り返ってみれば、私が初めていわゆる紀要に論文を出したのは、もう30年以上前のことである。まだ大学院を出たてで、自分の書いたものが活字となって公刊されたことに感激したように思う。一般に、紀要は、学会誌や有名な商業誌よりも格下に見られることが多いし、実際、それらよりも論文を載せてもらいやすい。しかし、両者は同じものの格が違うだけなのだろうか。私は、両者はそもそも種類が違うのではないと思う。学会誌などの主要誌に掲載されるのは、どうしても、その時代のスタンダードな考え方や手法に沿ったものに限られる。一方、紀要であれば、考え方がスタンダードでなくとも面白いものや、萌芽的なものや、なかなかデータが集めにくいものなどを載せることができる。30年前は紀要論文はあまり人目につかなかったが、現代ではデータベースで検索され多くの人に読んでもらうことができるようになり、その価値は高まっていると言えよう。今年度は所長も事務職員も交替したばかりで大変な中ご尽力下さったことに御礼申し上げます。そして何よりもご投稿下さった執筆者の方々に一層の感謝を申し上げます。

言語研究センター運営委員
小松 雅彦